

賀来条里跡

賀来川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

大分県立埋蔵文化財センター

賀来条里跡

賀来川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

本書は、大分県教育委員会が国土交通省大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した賀来川河川改修工事に伴う賀来条里跡の発掘調査報告書です。

「条里」とは耕地を一町（約109m）間隔で区切る土地区画制度で、日本において古代から中世後期にかけて実施されたものです。大分市賀来地区の水田には、このような条里地割が広い範囲で確認できます。

発掘調査を実施した地点にも、近隣地に条里地割をもった水田が存在しますが、発掘調査では明瞭な水田区画を検出することができませんでした。このことは、この発掘調査地点には条里地割が及んでいなかったことを示します。

その一方、今回の発掘調査では、弥生時代中期の土坑や平安時代から鎌倉時代の流路（旧河道）・溝・土坑などが発見され、出土した遺物から賀来川南岸における生活の痕跡を確認することができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和2年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

1. 本書は平成 29 年度に実施した、大分県大分市大字東院^{トウイン}に所在する賀来条里跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国土交通省大分河川国道事務所の依頼をうけて、大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成 29 年（2017）10 月 10 日から 12 月 1 日にかけて実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第二課 吉田寛（現大分県立歴史博物館）・園田涼太（現国東市教育委員会文化財課）が担当した。
4. 発掘調査の実施に際し、調査の支援業務委託を導入した。現地での遺構実測や写真撮影等の記録作成作業は、県調査員の指導監督の下、業務受託者である株式会社九州文化財総合研究所（大分市大字宮崎 1387-1）が行った。
5. 出土品の遺物洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は株式会社九州文化財総合研究所に委託し、平成 30 年度（2018）に大分県立埋蔵文化財センターの施設内で行った。報告書作成は、大分県立埋蔵文化財センターの担当職員が令和元年度（2019）に実施した。
6. 出土遺物および写真・実測図などの調査記録は、大分県立埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
8. 本書の編集・執筆は、吉田寛が行った。

目 次

第 1 章 はじめに…………… 1	第 3 章 遺構と遺物 …… 4
第 2 章 遺跡の立地と環境…………… 2	第 4 章 総括 …… 13

図 版 目 次

第 1 図 賀来条里跡と周辺の遺跡 (1/25,000) …… 3	第 9 図 SR002 出土遺物 (1/3) …… 10
第 2 図 確認調査の状況と発掘調査区 (1/1,200) …… 4	第 10 図 SK003 出土遺物 (1/3) …… 10
第 3 図 遺構検出状況略図 (1/300) …… 5	第 11 図 SD004・SX005 実測図 (1/80、1/30) および SD004 出土遺物 (1/3) …… 11
第 4 図 遺構配置図 (1/200) …… 6	第 12 図 SK006 実測図 (1/30) …… 12
第 5 図 調査区北壁土層実測図 (1/40) …… 7	第 13 図 遺構に伴わない出土遺物 (1/3) …… 12
第 6 図 調査区東西ベルト土層実測図 (1/40) …… 8	第 14 図 現地形に見える賀来条里跡の条里区画 と調査地点 …… 13
第 7 図 SK001 実測図 (1/10) …… 9	
第 8 図 SK001 出土遺物 (1/4) …… 9	

表 目 次

第 1 表 賀来条里跡遺構一覧表 …… 5

第1章 はじめに

調査の経緯

国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所では、近年の台風等による河川災害を未然に防止するため、大分市東院地区において賀来川流域の河川改修工事を実施している（賀来川東院地区築堤護岸外工事）。賀来川南岸一帯は「賀来糸里跡」の名称で周知遺跡として登録されており、当該事業の対象地が遺跡の範囲に含まれている地点が存在した。そこで、大分県教育委員会は国交省大分河川国道事務所と協議を行い、事業に対する地元説明や用地買収等が終了した場所から確認調査を実施し、当該地点に対し発掘調査（本調査）が必要かどうかを判断することとなった。

平成28年度は、賀来川南岸の現堤防に隣接する水田を調査対象とした。確認調査は2016年12月15日に実施し、重機を利用して試掘トレンチを掘り下げた（第2図参照）。その結果、調査区西側の地表下約40～50cmで黄褐色粘質土の地山を確認し、さらに弥生土器高坏の大型破片や灰褐色粘質土を埋土とする溝1条を検出した。調査区東側では地山を確認することができなかったため、流路などの大型遺構が存在する可能性が考えられた。確認調査の結果、当該地点は本調査が必要と判断されたが、地権者の都合により本調査は次年度の水田収穫後に実施することになった。本調査まで一定の時間を空けることとなったため、出土した高坏は写真撮影などの最小限の記録を行って取り上げた。本調査は2017年10月10日から12月1日に実施した。調査面積は561㎡で、溝1、流路1、土坑4などを確認した。確認調査で大型遺構と想定したものは自然流路（旧河道）であることが判明した。流路については出土遺物が僅少であったことから、完掘はしていない。流路はさらに東に延びることが想定され、その延長部が次年度の工事対象区域に含まれていた。この流路延長部を本調査の対象にするか否か、判断に迷うところであったが、これについては次年度の確認調査の結果で判断することとした。平成30年度については、2018年10月9日に当該年度の工事地区を対象に確認調査を実施した。当該地点には昨年度の本調査で流路の延長部が存在することを確認していたが、確認調査時には遺物が1点も出土しなかった。そのため、正式な発掘調査を実施しても得られる成果は極めて少ないと判明し、本調査の必要はないと判断した。従って、平成30年度は前年度の発掘調査で出土した遺物の整理作業のみを行った。平成31年／令和元年度については、報告書の執筆・編集作業を行った。

調査組織

調査組織は下記のとおりである。

平成28年度 後藤一重（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長） 小柳和宏（同 次長）

友岡信彦（同 受託事業班参事） 吉田寛（同 主幹・確認調査担当）

井大樹（同 主事・確認調査担当）

平成29年度 阿部辰也（大分県立埋蔵文化財センター所長） 友岡信彦（同 参事兼調査第二課長）

吉田寛（同 調査第二課課長補佐・発掘調査担当） 服部真和（同 調査第二課主事）

井大樹（同 調査第二課主事） 園田涼太（同 調査第二課主事・発掘調査担当）

平成30年度 江田豊（大分県立埋蔵文化財センター所長） 吉田寛（同 調査第二課主事・整理作業担当）

綿貫俊一（同 調査第二課課長補佐・確認調査担当） 服部真和（同 調査第二課主事）

平成31年／令和元年度

江田豊（大分県立埋蔵文化財センター所長） 後藤見一（同 調査第二課長）

綿貫俊一（同 調査第二課課長補佐） 服部真和（同 調査第二課主任）

第2章 遺跡の立地と環境

賀来川は、大分県由布市東部から大分市西部を流れる大分川水系の一級河川である。その上流は由布市狭間町三舟付近で由布川と石城川に分岐し、下流は大分市賀来南地区付近で本流の大分川と合流する。

賀来川右岸の大分市東院から賀来地区にかけては、河岸段丘上に糸里遺構が認められる。これらは「賀来糸里跡」の名称で周知遺跡とされており、本報告はこの周知範囲の一面を発掘調査した正式報告書となる。賀来糸里跡の糸里地割ラインは、座標北に対して約30度東に振れており、これは同市中尾の台地からの傾斜と賀来川の氾濫原がつくる傾斜に規制されたものと考えられている。

賀来糸里跡の周囲に位置する中世遺跡としては、12～13世紀代の屋敷もしくは集落遺跡である宮苑遺跡、賀来中学校遺跡がある。糸里地割の水田が存続する時間幅の中で、これらの遺跡も存続しており、遺跡と糸里との関連性の解明が課題となる。宮苑遺跡は後述する千代丸古墳を屋敷の領域に取り込んだ興味深い景観を呈していた遺跡であることが判明している。

視野をやや大きくとって、賀来糸里跡の周囲に立地する遺跡を時代ごとに掲げてみよう。旧石器時代の遺跡としては、九州横断道路建設に伴って発掘調査が行われた机張原遺跡・庄ノ原遺跡、大分大学医学部（旧大分医科大学）建設に関連して発掘調査が行われた野田山遺跡がある。縄文時代の遺跡としては庄ノ原遺跡や野田山遺跡で早期の押型文土器などが発見されている。また、下黒野遺跡では晩期の刻目突帯文土器などが発見され、それらの土器は「下黒野式」として、大分県下における縄文時代晩期後半の型式名として採用されている。また、賀来糸里跡の周知範囲でも縄文時代後期から晩期頃の土器片が少量ながら検出されており、注意が必要となる。

弥生時代から古墳時代初頭の遺跡としては賀来中学校遺跡・宮苑井ノ口遺跡などがある。賀来中学校遺跡は区画溝を有する弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の集落遺跡である。また、安国寺式の壺形土器を小児用の土器棺として使用しているのも特徴的で、同様の特徴をもつ土器棺墓は宮苑井ノ口遺跡でも発見されている。

庄ノ原台地には前方後円墳である蓬萊山古墳があり、その周囲には古墳時代中期以降と推定される田崎古墳群、万寿山古墳群、深河内古墳がある。台地の南側、賀来川を望む端部には、同じく古墳時代中期前後と推定される餅田古墳群が構築されている。

賀来川の北に位置する庄ノ原台地との裾部には狭小な平野が広がり、当該部分には千代丸古墳、丑殿古墳など、大分市内では有数の横穴式石室を有する後期古墳が存在する。千代丸古墳は国指定史跡で、横穴式石室の内部に石棚を有し、その前面に三角形や四角形の幾何学文様や人物・動物の線刻がある。丑殿古墳の内部には縄掛け突起をもつ家形石棺が収められている。また、台地の傾斜部には石御堂横穴墓群・餅田横穴墓群・井手ノ上横穴墓群・上片面横穴墓群など数10基を単位とする横穴墓群が構築されている。

奈良・平安時代の遺跡については、確認事例が少ない。賀来糸里跡の糸里区画の景観が当該段階まで遡るか否かが当面の課題となるが、発掘調査のデータの蓄積が少ない現状では、その判断が難しい。国分地区には豊後国分寺が造営されている。創建当初の伽藍はもちろん残存していないが、寺院自体は軒余曲折を得ながら、現在まで存続している。

中世については、先で触れた12～13世紀代の宮苑遺跡、賀来中学校遺跡のほか、戦国期（15～16世紀）に比定される金谷追丸山城跡がある。円形単郭の中世城館で、曲輪には土塁が良好な状態で残存し、土塁に伴う横堀も確認できる。横堀には土橋状の通路も敷設している。



- | | | |
|-------------|--------------------|-----------------------------|
| 1 賀来条里跡 | 1A 賀来条里跡 (本報告調査地点) | 18 賀来条里跡 (大分市教委 2007 年調査地点) |
| 2 机俣原遺跡 | 3 金谷迫古墳 | 5 宮苑遺跡 |
| 8 石御堂横穴墓群 | 9 餅田古墳群 | 10 餅田横穴墓群 |
| 14 上片面横穴墓群 | 15 丑殿古墳 | 16 庄ノ原遺跡 |
| 20 田崎古墳群 | 21 万寿山古墳群 | 22 深河内古墳 |
| 26 賀来西遺跡 | 27 賀来中学校遺跡 | 28 下黒野遺跡 |
| 32 中尾古墳 2号墳 | 33 中尾古墳 | 34 野田遺跡 |
| 38 鐘ヶ瀬廢産仏 | 39 豊後園分寺跡 | |
| | | 7 中村遺跡 |
| | | 12 井手ノ上横穴墓群 2 |
| | | 13 井手ノ上横穴墓群 1 |
| | | 17 庄ノ原片面遺跡 |
| | | 18 蓬萊山古墳 |
| | | 19 田崎遺跡 |
| | | 24 上片面遺跡 |
| | | 25 宮苑井ノ口遺跡 |
| | | 30 小原横穴墓 |
| | | 31 中尾遺跡 |
| | | 36 六重原遺跡 |
| | | 37 園分遺跡 |

第1図 賀来条里跡と周辺の遺跡(1/25,000)

第3章 遺構と遺物

遺構の概要

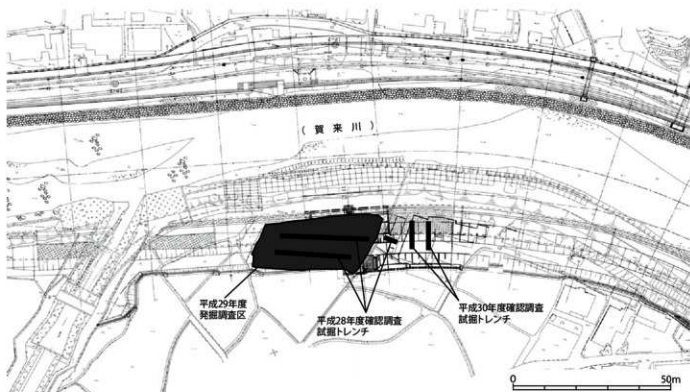
賀来条里跡の発掘調査（本調査）は、2017年10月10日から12月1日に実施した。発掘調査面積は561㎡である。調査区は世界座標に乗せた10m方眼を測量の基準とし、西から東へ1～5、北から南へA～Cの番号を付して、それぞれの区画を呼称することにした（第3・4図参照）。

調査区全体を対象とした重機による表土掘削の後、遺構検出（第3図上段）を行ったところ、A2～C2区以東では黄褐色粘質土の地山が広がることが確認できた。また、A2～B2区では溝SD004の一部と推定される遺構を検出するとともに、確認調査の時に弥生土器の高坏が単独で出土した地点についても押さえることができた。さらに、A2～C2区以西では、地山とは性状が異なる粘質土や砂質土が堆積していた。粘質土や砂質土の広がり、当該地点に大型の遺構もしくは掘り込みが存在していることを予測させた。

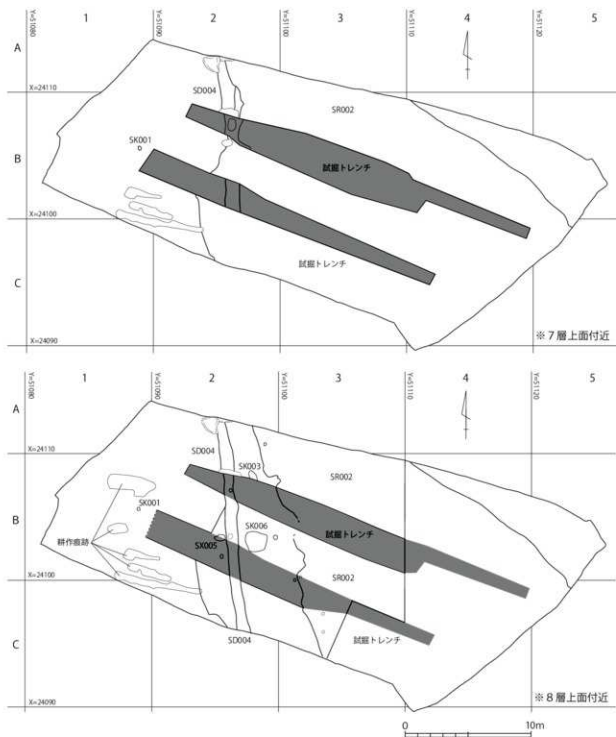
その後、人力によって、A2～C2区より以西を一定深度で掘り下げ、再度遺構検出と精査を行った。その結果、大型の遺構もしくは掘り込みと推定していたものは自然流路（旧河道）であり、流路SR002の西側の落ち込みラインを明確にできたほか、B2区で少数の土坑、B2～C2区で溝SD004の延長部を確認した（第3図下段）。

今回の発掘調査で、最終的に確認できた遺構は、溝1・流路1・土坑4などのほか、耕作痕跡と推定される浅い溝状もしくは土坑状の掘り込みである。遺構の時期については、SK001が弥生時代中期後半、その他の遺構の大半が12～13世紀代に比定される。耕作痕跡については、埋土から近世陶磁器片が少量出土したため、近世以降の所産であろう。

以下、遺構の詳細と出土遺物を報告する。



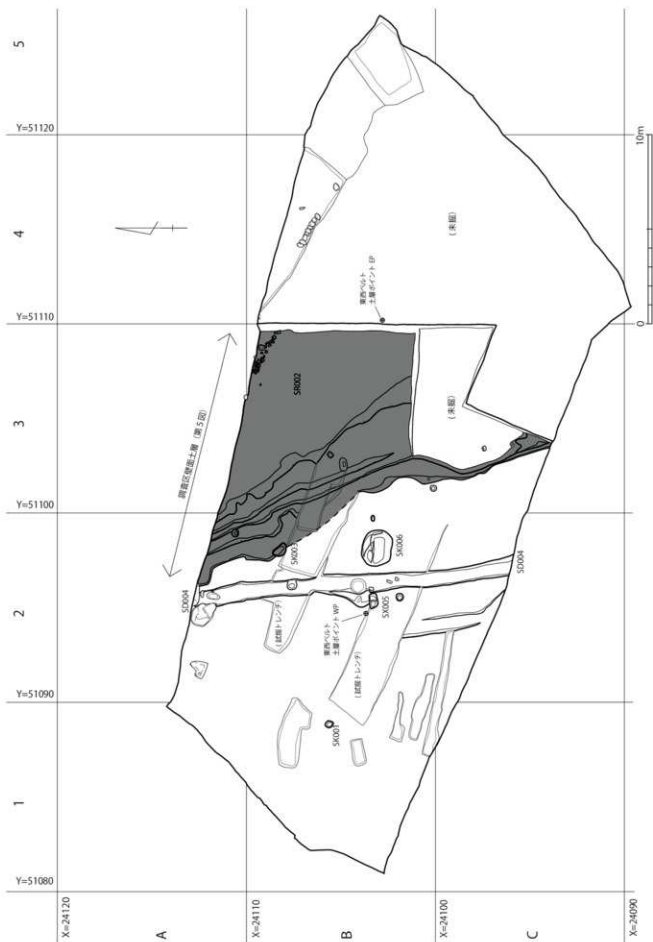
第2図 確認調査の状況と発掘調査区(1/1,200)



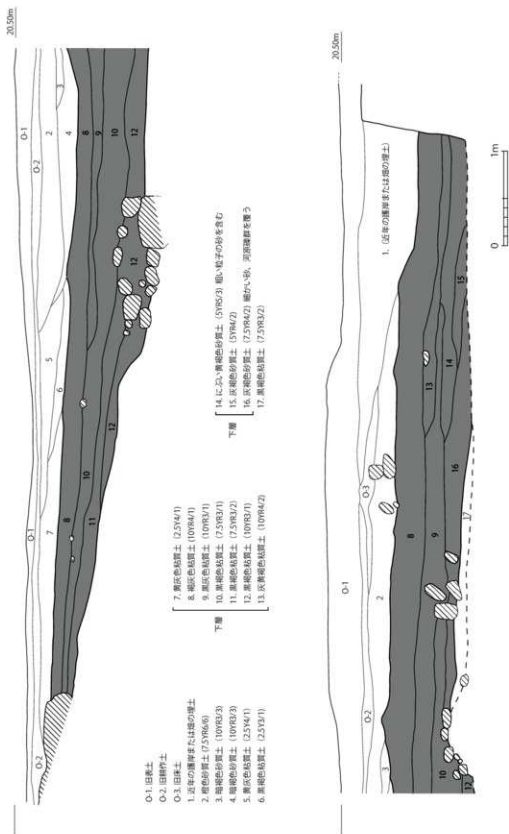
第3図 遺構検出状況略図(1/300)

第1表 質来奈里跡遺構一覧表

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項
SK001	S001	土坑	B1区	弥生時代中期後半	脚部下平を打ち欠いた高坏が単体で出土
SR002	S002	流路(旧河道)	A2～C4区	12世紀以降	埋土下位より礫が多数出土
SK003	S003	土坑	B2区	12～13世紀?	土師質土器小皿の小破片出土
SD004	S004	溝	A2～C2区	12～13世紀	中国産陶磁器の小破片が少量出土
SX005	S005	不明	B2区	不明	人工的な遺構ではない? 河原礫などがはまっていた跡か?
SK006	S006	土坑	B2区	不明	出土遺物なし



第4図 遺構配置図(1/200)

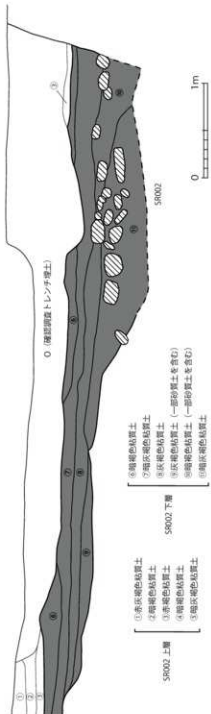


第5図 調査区北壁土層実測図(1/40)

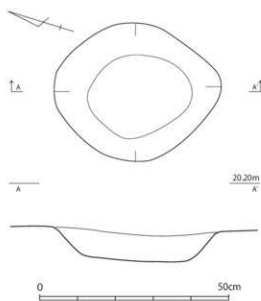
20.40m



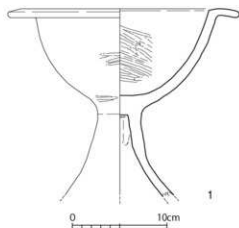
20.40m



第6図 調査区東西ベルト土層実測図(1/40)



第7図 SK001実測図(1/10)



第8図 SK001出土遺物(1/4)

SK001 (第7図)

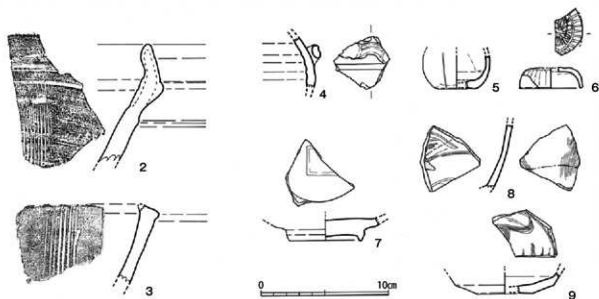
B 1区に位置する小型の土坑で、遺構の平面形態は略楕円形を呈する。その規模は東西0.36m、南北0.44m、深さ8cmを測る。土坑内部から弥生土器の高坏が出土した。高坏は試掘調査時に確認されたため、出土状況の詳細な図面や土層図を作成せずに取り上げてしまったが、土器は坏部を北西に向け、横倒しになった状態で出土した(写真図版2参照)。脚部の裾部全体が欠損していることから、当該部位は意図的に打ち欠かれていた可能性が高い。埋土と地山の性状・色調などがほとんど変わらないことから、土坑の掘削後、時間をおかずに土器が埋められたと推定する。高坏のほかには、出土遺物は認められない。遺構の規模は高坏の大きさより、ひとまわりほど大きなものであることから、当該遺構は高坏を埋納する目的で掘られたものであろう。遺構の年代は弥生時代中期後半に比定される。

SK001出土遺物 (第8図)

1は弥生土器の高坏である。脚部の裾部全体が欠損しており、当該部分を意図的に打ち欠いている可能性が高い。口縁部の一部にも欠損が認められるが、これについては意図的なものかどうか判断が難しい。L字状に屈曲する口縁部が特徴的な「須玖式」の高坏で、弥生時代中期後半に比定される。

SR002 (第4～6図)

調査区の東半部で検出した「流路(旧河道)」と推定される遺構である。旧表土や旧耕作土・旧床土および近年の造成土などを除去した後、現地表下約50～60cmで、地山とは異なる粘質土や砂質土の堆積を認め、A 2区からB 3区においては流路の西側の肩と思われるラインを検出した。埋土には砂質土と粘質土が交互に堆積する部位や拳大から頭大の川原礫が含まれる部位がある。特にA 3区とB 3区では頭大の川原礫が集中して出土した(写真図版3・4参照)。流路の東側の肩と思われる部位は確認できないことから、地山は東に向かって傾斜し、現在の河床のレベル付近まで連続するものと推定される。以上のような埋土の特徴から、当該遺構は流路あるいは小河川と推定され、賀来川の旧河道の一部と考えられる。埋土に砂質土と粘質土の互層が認められることから、当該遺構には流水があったことがわかる。流水の方向については、調査区の制限のため、それを判断する手がかりは少ないが、現在の賀来川の流れを参考にして、北西→南東と考えておきたい。



第9図 SR002出土遺物(1/3)

出土遺物は遺構の規模や埋土に比して極めて少なく、しかも小破片が多い。礫の集中部や埋土中から12～13世紀代の陶磁器片、埋土上位から15～16世紀代の備前焼や瓦質土器の播鉢片が出土している。出土遺物が僅少なことから、流路全体の完掘は断念し、A2～B3区を主体に掘り下げを実施した。遺構の状態と出土遺物から、当該流路は12～13世紀代に機能し、13世紀代には礫の集中部分を含む大部分が埋没し、流路としての機能を停止している。15～16世紀代の遺物は、その後の堆積層に混入したものであろう。

SR002出土遺物（第9図）

2・3は埋土上位から、4～9は礫の集中部および埋土中からの出土遺物である。

2は備前焼播鉢の口縁部で、15世紀末から16世紀前半の製品である。3は瓦質土器播鉢の口縁部で、15～16世紀代に比定される。4は中国産白磁四耳壺の肩部破片で、把手が残存する。5は中国産白磁小壺で、胴部下位の破片である。外面に筋の痕跡が認められ、底部付近は露胎となる。胴部内面にも部分的に露胎となっている。6は中国産青白磁で、合子の蓋である。7は中国龍泉窯系青磁碗の底部破片で、内底部は露胎となり、見込みには刻印（スタンプ）の痕跡が認められる。8は中国同安窯系青磁碗で、胴部下半部の破片である。9は中国同安窯系青磁皿で、底部付近の破片である。4～9は、いずれも12～13世紀代の製品である。

SK003（写真図版2）

B2区に位置する小型の土坑で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西0.5m、南北0.8m、深さ20cmを測る。流路SR002と重複するが、埋土が類似しており、相互の切り合い関係を明確にできなかった。埋土中より、ごく少量の土器片が出土している。出土遺物が僅少ではあるが、遺構の状態と出土遺物から、遺構の年代は12～13世紀代と推定される。



第10図 SK003
出土遺物(1/3)

SK003出土遺物（第10図）

10は土師質土器小皿である。口縁部から底部の一部までが残存するが、小破片である。胎土は淡褐色を呈し、底部外面には回転糸切りの痕跡が認められる。

SD004 (第11図)

A2～C2区に位置する溝で、調査区を南北に縦断する形で検出された。その規模は長さ約17.0m、幅1.0m、深さ45cmを測る。埋土の大部分が灰色系のシルト層もしくは砂層で構成されており、流水があったことがわかる。埋土のほとんどが土壌で形成されるが、礫も少量含まれていた。埋土上位より、陶磁器片がごく少量出土した。遺構の状態と出土遺物から、遺構の年代は12～13世紀と推定される。

SD004出土遺物 (第11図)

11は中国同安窯系青磁皿で、底部付近の破片である。内面には櫛状工具によるジグザグ文などの文様が認められ、底部外面は露胎となる。12は中国龍泉窯系青磁碗の口縁部破片で、残存部の内外面には文様は認められない。11・12とも12～13世紀代の製品である。



第11図 SD004・SX005実測図(1/80、1/30)およびSD004出土遺物(1/3)

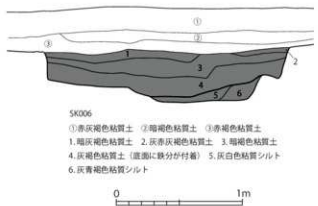
SX005 (第11図)

B2区に位置する遺構で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西0.9m、南北0.4m、深さ55cmを測る。遺構は見かけの上では2段掘りとなっているが、人為的な掘り込みとしては不自然な形態である印象を受ける。埋土中から出土遺物は認められなかった。断定はできないが、地山である黄灰色粘質土に含まれていた大型の礫が外れた際に生じた窪みである可能性が高く、人為的な遺構ではないと考える。



SK006 (第12図)

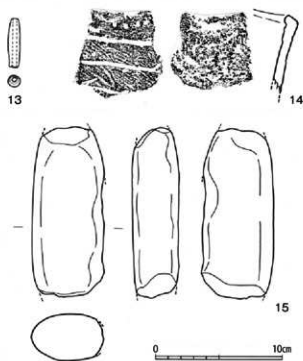
B2区に位置する遺構で、遺構の平面形態は不整形である。その規模は東西1.9m、南北1.55m、深さ40cmを測る。埋土は灰褐色系の土壌で形成され、4層の下位には鉄分の付着が認められた。このことから、4層下位が底面として、水が溜まっていた時期が一定期間存在したことがわかる。人為的な遺構であることには間違いないと考えるが、その性格は不明である。出土遺物も認められず、遺構の時期も不明である。



第12図 SK006実測図(1/30)

遺構に伴わない出土遺物 (第13図)

13は管状土鍾で、完存品である。製作年代を断定するのは困難であるが、中世以降の製品であろう。14は波状口縁を呈する縄文土器深鉢の口縁部である。口縁端部に刻目、外面に縄文と沈線が施される。縄文時代後期初頭から前葉に比定される。15は磨製石斧で、上端部と下端部に欠損が認められる。石材は安山岩で、重量は440gを測る。これも断定するのは困難であるが、縄文時代から弥生時代の所産であろう。



第13図 遺構に伴わない出土遺物(1/3)

第4章 総括

本調査で確認された遺構は、弥生時代中期の土坑1、12世紀以降の流路跡1、12～13世紀代の土坑1・溝1、その他時期や性格が分からないもの2となる。

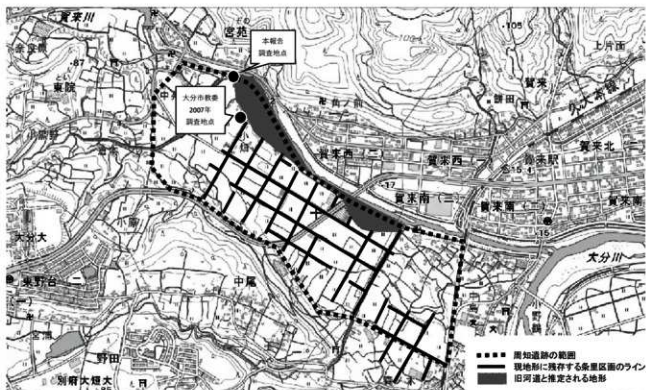
弥生時代中期の土坑 SK001 には、脚部下半を意図的に打ち欠いた高坏が単独で埋納されていた。周囲に同時期の住居跡などが認められないことから、祭祀的な様相を呈する遺構である可能性が高い。

12世紀以降の流路跡 SR002 は12～13世紀代に機能していたと推定されるが、13世紀代には埋土下位の河原礫の集中部分を含む大部分が埋没し、その機能を失っている。調査区の周辺地形をみると、流路跡の位置は賀来川の旧河道と推定されるラインと重複していることが分かる。埋土中からは小破片ではあるが、中国景徳鎮系白磁の四耳壺や合子など、日常品としてはグレードの高い製品が含まれており、調査区の周辺に当該時期の屋敷や集落が存在していたことを予測させる。

12～13世紀代に代に比定される SD004 は小規模な溝で、流水の痕跡が認められた。その主軸は座標北に対して、やや西に振れており、周囲の条里地割の主軸とは大きく異なっている。土坑 SK003 については、出土遺物が少ないこともあり、その詳細な機能や性格は不明である。

以上のように、本調査で確認された遺構については、条里地割に直接的に関連するものは確認できなかった。このことから、条里地割による水田が本調査地点には及んでいなかった、もしくは存在しなかったと言い切つてよい。

「条里」とは水田などの耕作地を一町（約109m）間隔で仕切るもので、日本の古代から中世にかけて実施された土地区画制度とされている。1950年代には大分市賀来地区にも条里地割が認められることが指摘⁽¹⁾され、1990年代に刊行された辞典類にも「大分市東院から賀来にかけて東西15町、南北5町程度の条里遺構がみられる」⁽²⁾と記載されている。



第14図 現地地形に見える賀来条里跡の条里区画と調査地点

地形図や航空写真から、現状で視認できる条里地割ラインを表現したものが、第14図である。この図と「大分県遺跡地図」⁽³⁾による周知遺跡の範囲を比較すると、北西側では確認できる条里地割と地割ラインが認められない東側を含めた広い範囲となっているのに対し、南東側では周知範囲外にも地割ラインが伸びている可能性がある。もっとも、これは現地地形に残存する地割ラインを拾ったものなので、地下の状況は発掘調査を実施してみないと正否が判断できない状況ではある。

第14図を検討すると、賀来川の旧河道と推定される地形が認められ、「大分県遺跡地図」では当該部分も遺跡の範囲に含まれている。今回の調査地点は、まさにこの旧河道の北西端付近に相当し、発掘調査の結果、埋設していた流路SR002が検出された。SR002は旧河道であり、流路の埋没時期が13世紀頃と特定できたことが、今回の発掘調査の大きな成果のひとつであるといつてよいだろう。

その一方、2007年には個人住宅建設に伴い、大分市教育委員会が発掘調査を実施した地点がある。調査面積は小規模であったが、掘立柱建物跡や溝状遺構、備前焼大甕を使用した埋甕遺構など、14世紀後半から15世紀代の遺構が確認された⁽⁴⁾。当該時期の屋敷もしくは集落の遺跡であると推定される。調査地点は旧河道のラインに近接する場所ではあるが、河岸段丘上に立地し、かつ現状で残存している条里地割が切れるところとなる。この遺跡(屋敷もしくは集落)は条里区画による水田が営まれていた場所を潰して新たに構築された可能性もあるが、条里区画による水田が元より造営されていなかった、もしくは耕作放棄されていた場所に構築された可能性もある。そうであれば、条里水田が広がる領域の北西に隣接する位置に、屋敷または集落が営まれていた景観が復元できるであろう。

一方、賀来条里跡の南側の丘陵状上に位置する中尾地区には「ユウジャク(ヨウジャク)」の地名をもつ地点があり、中尾地区の場合は「遊若」^{ユウニク}(もしくは「遊若門」^{ユウニクモ})⁽⁵⁾と表記される。服部英雄によると、「ユウジャク(用作)」とは中世における領主の直営田を意味する地名とされており、賀来条里の存続時期とも時間的にシンクロするため、両者の関連性の検討が将来の課題となろう。また、賀来川を挟んだ右岸には宮苑遺跡⁽⁶⁾という12～13世紀の屋敷跡、および賀来川と大分川が合流する地点付近には、同じく12～13世紀の屋敷跡である賀来中学校遺跡⁽⁷⁾が確認されており、これらの遺跡との関連性の解明も必要となる。

今回の調査では、賀来条里と直接的に関連する水田遺構・条里区画などは確認できなかった。従って、条里地割が成立した初源時期などの考古学的なデータを提出することはできなかったが、本調査地点にまでは条里区画が及んでいなかったことを確認した。加えて、調査地点の周囲に存在する遺跡に言及し、賀来条里との関連性を指摘した。今回は発掘調査等で判明した上記の現状を記すに留め、今後の検討に備えることとした。

註(1) 兼子俊一「大分県下の条里遺構」(『大分縣地方史』4 1955年)

(2) 「賀来地区条里地割遺構」(『大分県の地名』日本歴史地名大系第45巻 平凡社 1995年) p493～494

(3) 大分県教育委員会「大分県遺跡地図」(2018年)

(4) 池邊千太郎・三嶋桂司「賀来条里遺跡」(『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.19 2008年) p20～23

(5) 服部英雄「二巻のユウジャク～現地調査の方法による中世村落史研究への試み～」(『大分県立宇佐風土記の丘 歴史民俗資料館研究紀要』Vol. 5 1988年) p48～49

(6) 佐藤興治「歴史遺構をさぐる」(『大分市史』中巻 1987年)

(7) 大分市教育委員会「賀来中学校遺跡」(1994年)



賀来条里跡空中写真（垂直写真・上が南）



賀来条里跡空中写真（西から）

写真図版 2

土坑SK001遺物出土状況
(試掘調査時)



土坑SK001完掘状況



土坑SK003完掘状況





流路SR002検出状況（北から）



流路SR002掘削状況（北から）



流路SR002上空写真（上が南）



流路SR002掘削状況（南から）

溝SD004完掘状況（北から）



溝SD004土層（南から）



土坑SK006完掘状況（南から）





調査区東西ベルト
土層全景 (南)



調査区東西ベルト
土層 (北東から)



調査区北壁土層全景





報 告 書 抄 録

ふりがな	かくじょうりあと
書名	賀来条里跡
副書名	賀来川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	-
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	吉田寛
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152 大分県大分市教録町1-61 TEL 097-552-0077
発行年月日	2020年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かくじょうりあと 賀来条里跡	あひだしおおあびごとい 大分市大字東院	44201	201054	33° 21' 62"	131° 54' 81"	2017.10.10 ～ 2017.12.01	561㎡	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
賀来条里跡	-	弥生時代 ・中世	流路(旧河川)、溝、 土坑	土器、陶磁器	
要 約	<p>今回の調査地点は、賀来条里跡として周知されている範囲の北西に隣接する地点である。賀来川河川改修工事に伴い発掘調査を実施した。発掘調査の結果、水田区画などは確認できず、この地点には条里的な地割が及んでいなかったことが判明した。</p> <p>しかしながら、当該地点からは弥生時代中期後半の土坑や平安時代から鎌倉時代の流路(旧河道)・溝・土坑などが発見され、賀来川南岸における生活の痕跡を確認した。特に、弥生時代中期後半の土坑からは脚の裾部を打ち欠いた高坏が単独で出土しており、祭祀的な様相を示している。また、平安時代から鎌倉時代の流路(旧河道)・溝・土坑の存在は、近隣地に同時代の集落などが存在した可能性を示唆している。</p>				

賀来条里跡

賀来川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第16集

令和2年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152 大分県大分市牧緑町1-61
TEL 097(552)0077

印刷 株式会社有明印刷
〒870-0844 大分県大分市大字古国府1303-1
TEL 097(546)6677
